

主 題：最初の殉教者—ステパノ
 聖書箇所：使徒の働き 6章 1—10節

神が大いに祝された教会、初代教会がまさにそうでした。使徒の働き4章を見ると「**信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。**」(4:32)と記されているように特別な教会でした。そのようなすばらしい教会でしたが、その教会にも問題が起こって来ました。兄弟姉妹たちの間に「配給」に関する問題が生じたのです。使徒の働き6章1節を見ると、その当時の教会が抱えていた問題が記されています。「**そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。**」と、ここにその当時の教会の様子が詳しく記されているのです。配給に関する問題が起こったと。このことを私たちが理解するために、この当時の教会を構成していた人々を見る必要があります。ユダヤ人といっても2種類のユダヤ人がいたことが記されています。みことばが教えているように、ギリシャ語を使うユダヤ人たちと、ヘブル語を使うユダヤ人がいたのです。ギリシャ語を使うユダヤ人たちとは、ほとんどの場合、彼らはギリシャやローマの様々な町で生まれ住んでいた人々です。ですから、彼らはギリシャ語を使うユダヤ人で「ヘレニスト」と呼ばれる人たちでした。そして、ヘブル語を使うユダヤ人たちとは、おそらく、ヘブル語というよりアラム語を使う人たちであって、パレスチナで生まれたユダヤ人たちです。ですから、パレスチナで生まれた人とパレスチナ以外で生まれた人々、生まれも違うし、語ることばも違ったのです。そして、みことばが教えるのは、ヘレニストのやもめたちの配給がなおざりにされていたというのです。しかも、ヘレニストたち、つまり、ギリシャ語を使うユダヤ人たちのやもめたちが配給を受けていなかったのです。なぜ、そのようなことが起こったのでしょうか？実は、この当時教えられていたことがこのような現状をもたらしたのです。というのは、そのユダヤ人たちの間では、イスラエルの地に葬られることが得であると考えていたのです。タルムードという、イスラエル人が重んじる教えが記されているものの中に、このような記事があります。「イスラエルの地の外で死んだ者は再び生きることにはできない。私は生きる者の地に歓喜をおくと、エゼキエル26:20で言われているからである。」と、このように聞くと、だれしもイスラエルで死のうと思えます。それで、人々はイスラエル以外のところからパレスチナに戻って来たのです。そこでご主人が亡くなって奥さんが残される、つまり、やもめが増えたのです。このような伝統の教えがあって、パレスチナに住むユダヤ教の教師は「死人がよみがえるのはイスラエルにおいてのみで、他の土地で亡くなった義なる者たちは、イスラエルまでの全行程、地下を転がって戻らなくてはならない。」とこう聞いて誰も喜ぶ者はいません。それなら、死ぬ前に移り住もうと考え、その結果、たくさんやもめたちがいたのです。最初はよかったのです。最初は12使徒たちが彼らを養っていました。ところが、だんだん人数が増えてきたので、12使徒たちだけではすべての人たちに十分な配給をすることができなくなって来たのです。そこで、この6:1で教えるように、彼らは7人の非常にすばらしい霊的なリーダーを立てましょうということになるのです。

2節からこのようにあります。「**そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。:3** **そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。:4** **そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」:5** **この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、:6** **この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。」**、教会はこの7名を選んだのです。そして、彼らがこのような配給の働きに携わるようにと任命をしていくのです。それで、このことに関してここで付け加えておきたいことは、この箇所からある教会は、このように執事を選んだのだから、私たちも7人の執事を選ばなければならぬと、そのように信じる人たちがいます。なぜ、そのように言うのかというと、2節にある「仕える」ということば、このことばがもっている意味は「執事」ということばの語源と同じではないか、だから、ここで言われている人々は、仕える人々、執事たちだと、そのように言うのです。しかし、私たちはここで言われていることが、執事を7人選びなさいとか、この記事が初めての執事を選んだ所ではないということを知るのです。なぜなら、実はここで使われていることばは、新約聖書においては「デアコ

ノス」ということばですが、このことばはかなり広い意味で使われています。F. ブルースはこのように言います。「このことばは召使い、キリストのしもべとしての行政長官、キリストのしもべとしてのキリスト教の牧師、教師などに、また、キリスト自身にさえ使われている」と。ですから、このことばをもってこれは執事たちだとは言いきれないのです。このようにこのことばは幅広く使われているからです。

5節には7人の名前が出てきました。この7人の中で分かっている者は非常に限られています。私たちが知ることができるのは、私たちが今から学ぼうとしているステパノとピリポ、最後に出てくるニコラオの3人だけです。3人目のニコラオはアンテオケの改宗者、ですから、アンテオケという町でユダヤ教に回心した者です。これぐらいしか分かっていません。よく分かっているのはステパノとピリポの二人に関してだけです。彼らは執事というよりも伝道者であり、宣教師であり、執事以上の働きをしている人たちです。ですから、その意味からも、この箇所が初めての執事たちを指しているのでもないし、また、この7人に関しても、7人選ばなくてはならないことをここで教えているのではありません。

なぜなら、ダラス神学校のスタンレー・ツウーセイント先生は「7人を任命することはユダヤ人たちの間の伝統であった。7人の尊敬に値する人たちは公式の議会における、公共の仕事を監督したのだ」と言っています。ですから、彼が言うことは、ユダヤ人たちはそのように7名を公の仕事のために任命したのだと。ですから、7名という数字が特別な教会の中で守っていかなければならない数字ではないと言っています。英国を代表する新約学者のハワード・マーシャル先生も「7人の選任は特定の務めのために、7人の小委員会を構成するユダヤ教の慣例にならったものである」と言っています。ですから、ある人々は、ここから執事は7名でなければならないと言うのですが、聖書はそのようなことを教えているわけではありません。ただ言えることは、教会のリーダーというのはどの時代であっても、どの地域であっても、どの国であっても、みな霊的な人々でなければならないということです。ここで選ばれた7人も霊的な人々であったのです。そして、その一番最初に名前が上がっているのがステパノという人物です。今からこのステパノという人物について学んでいきます。どのような人物だったのか、どのように彼は生きたのか、私たちの信仰の先輩であるこの一人の人物を今から見て行きます。

このステパノという名前は「冠、勝利者の冠」という意味をもった名前です。特に皆さんに見ていただきたいことは、3節を見てください。7人が選ばれて行くのですが、この7人に共通していることは、「**御霊と知恵とに満ちた**」と書いてあります。5節を見てください。「**信仰と聖霊とに満ちた**」とあり、8節には「**ステパノは恵みと力とに満ち**」とあります。この霊的なリーダーたちに共通していたことは、彼らは知恵と聖霊とに満たされていたのです。5節の中でこのステパノに関して、ルカは特別に「**信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ**」と付け加えています。これはステパノに掛かっているのです。この「満たされた」ということばを私たちはしっかり理解しなければいけません。辞書では、これは「いっぱいになれる、完全に満たされる、満ちている、欠けた所がない、不足のない」という意味です。皆さんはこのことばをよくご存じです。例えば、エペソ5：18には「**また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。**」とあります。つまり、アルコールによって支配される生き方ではなくて、聖霊なる神に支配される生き方をして行きなさいと教えているのです。ですから、その人の心を何が支配するかによって、その人の言動が変わってきます。例えば、喜びが心を満たしている時は、その人から賛美が出てきます。また、その心が感謝に満たされているなら間違いなくその人から感謝の言動が出てきます。また、悲しみに満たされている時は、涙が出てきたり、その悲しみが表情や態度に表われてきます。何かに満たされるということは、その何かがその人の心を支配しているということなのです。

ですから、このみことばの中で3節、5節、8節で見た「満ちている」と記されていたことが、実は、ステパノの心を支配していたと、そのことをルカは私たちに教えているのです。いったい、何が彼の心を支配していたのか？何によって彼の心は満たされていたのか？今から5つのことを見て行きます。これがステパノという人物の特徴です。

☆ステパノの心を支配していたもの — ステパノの特徴

1. 御霊に満たされた人 3, 5節

3節「**御霊と**」、5節「**信仰と聖霊とに満ちた人**」と、聖霊、御霊と同じことですが、その御霊なる神が、聖霊なる神がその人の心を満たしていた、支配していたというのです。聖霊なる神は私たちの心の中に働いて、私たちにどのような働きを生み出そうとするのでしょうか？イエスを信じた者には聖霊なる神が与えられます。聖霊なる神をいただいた私たちはどのように導かれて行くのか、内在する聖霊は私たちが神のみこころに完全に従って行く者として歩んで行くようにと働くのです。私たちイエスを信じる者のうちに内在する聖霊なる神は、私たちが神のみこころに忠実に従って行くように、そのように変え

ようとしてくださるのです。そのような働きを始められたのです。なぜなら、神のみこころに完全に従っている人は神の栄光を現わす人だからです。だからパウロは、1テサロニケ5：19で「**御霊を消してはなりません。**」と言います。「御霊を消す」とは聖霊がいなくなるということではありません。本当に信じた人には聖霊が与えられ、その聖霊はあなたから離れることはありません。「御霊を消す」というのは、聖霊が私たちの内に為そうとする働きに対してNOということです。これが私たちクリスチャンの葛藤です。イエスを信じる前は罪の奴隷でした。私たちがすることはみんな罪であり、神に逆らうことでした。イエスを信じた私たちには選択が生まれています。生まれ変わった故に私たちは神に喜ばれることをして行きたいと思い、そのように生きて行こうとします。ところが、私たちのうちに肉が存在し、その罪が私たちの内に働いて、みこころではなく自分の思い通りに生きて行くようにと誘惑するのです。この葛藤の中に私たちは生きているのです。「**御霊を消してはなりません**」というの、あなたの内に聖霊なる神がいるなら、その聖霊なる神があなたを正しくみこころに沿って導いて行こうとする、その働きを邪魔してはならないし、それに逆らってはならないと、そのことをパウロは言うのです。ですから、この聖霊に満たされている人というのは、神のみこころに忠実に従って行こうとしている人々です。

皆さん、なぜこういう人が大切なのでしょう？教会に必要なのでしょうか？なぜなら、教会は私たちの私物ではないからです。これはキリストのものだからです。だから、私たちはいったい神が何を望んでおられるのか、そのみこころを求めてそれに従って行かなければなりません。それが教会の責任です。ですから、霊的なリーダーとはそういうことをしっかりと見極めることのできる人々です。みこころに従って行くのが教会の主に対する責任であり、しっかりと舵を取ってみこころに忠実に教会を導いて行くことができる、そういう人々が教会には必要であり、そういう人々を私たちはリーダーとして立てなければいけないのです。それは、教会がキリストに属するものだからです。大牧者であり、教会のかしらである方のみこころに沿って教会は歩んで行かなければならないからです。

このステパノはこのように神のみこころが何かを考え、そのみこころに忠実に歩んで行ったのです。聖霊なる神が彼を支配し導いてくださるように彼は歩んでいた、そのような人物だったとルカは私たちに教えてくれるのです。それがステパノの一つ目の特徴です。

2、知恵に満ちている人 3節

知恵とは、知識を実践に適用して行く能力です。つまり、知識を詰め込んでもそれだけではその人は知恵ある者にはならないのです。知識は大切です、しかも、私たちが言っている知識は世の中の雑学ではなくて、真理に関する神に関する知識です。だから私たちはそれを学ぶために神のおことばである聖書を学んでいるのです。神を知ること、それが知識の始まりであると聖書は言います。それで終わるのではなく、神を知った者はその神をより深く知り続けて行くことが必要です。だから、パウロはコロサイ1：10で「**…神を知る知識を増し加えられますように。**」と祈っています。イエス・キリストを心から信じ受け入れたパウロ、信仰はそれで終わったのではなく彼の信仰生活の歩みはそこから始まるのです。彼はもっと深くこのキリストを知りたいと願って、もっとキリストを知って行こうと、そのような歩みを彼は始めたのです。聖書によって私たちは神のことをより深く知って行くことができるのですが、この知恵を私たちはどのように得て行くのでしょうか？そのことについてソロモンが大切なことを教えてくれています。箴言2：1から二つの大切なことを教えています。あなたが知恵を得るために何をしなければいけないのでしょうか？

◎神が望んでおられる知恵を得るために必要なこと

(1) 教えを受け入れること

箴言2：1「**わが子よ。もしあなたが、私のことばを受け入れ、私の命令をあなたのうちにたくわえ、**」、「受け入れる」「たくわえる」ということばが出てきます。それが始まりなのです。どのようにしてたくわえますか？聞かなければたくわえることはできません。ですから、私たちは神のおことばを聞くだけでなく、それをしっかりとたくわえて行こうとしなければなりません。2節には「**あなたの耳を知恵に傾け、あなたの心を英知に向けるなら、**」とあり、まずあなたの耳を傾けなさいと言います。この「傾ける」ということばは「聞く、注意深くなる」という意味です。そのヘブル語が使われています。ですから、何となく聞くのではなく注意深く神のおことばを聞くということです。しかも、「**あなたの心を英知に向けるなら**」とあります。神に、また、神の命令に自分の心に向けて行くということです。ですから、ここでソロモンが言っていることは、ただ耳で聞いているだけでない、心からそのみことばに対して理解するように努力して行きなさい、理解しようと努めて行きなさいと、そのことを言っているのです。ですから、私たちが神の知恵をいただいて生きて行くために必要なことは、まず教えを受けることです。

(2) 教えを理解すること

3節には「もしあなたが悟りを呼び求め、英知を求めて声をあげ、」とあります。「悟り」は心でもって知ること、心で理解することです。「英知」、辞書によれば「深遠な道理を知り得るすぐれた知恵」とあります。ですから、どちらにしてもソロモンが言いたいことは、ただ聞くだけではなく聞いた神のメッセージを正しく理解するように真剣に努力して行きなさいということです。ですから、4節を見ると「**銀のように、これを捜し、隠された宝のように、これを探り出すなら、**」と真剣にそのことするのだと言っています。ですから、私たちはみことばを聞いて、何を言いたいのですか？あなたの真理はいったい何なのですか？とそのような真剣さ、熱心さをもって私たちは神のみことばをしっかりと理解するように努めて行かなければならないと言うのです。もしかすると、この部分に私たちの問題があるのかもしれませんが。私たちはみことばを聞いている、でも、真剣さが全然ない、聞くことに満足してそれで終わっているのかもしれませんが。だから、私たちは家に帰るともう忘れてしまう、何を聞いたのか？ソロモンは、もしあなたが神の知恵をもって生きて行こうとするなら、みことばを聞き、そして、そのみことばをしっかりと理解するように努力しなさいと言うのです。なぜなら、この知識というのは、必ずその人の生き方に影響を与えるものだからです。今から説明して行きます。

ソロモンが教えているこの「知識」というのは、あなたが本当に正しくみことばを聞き、それを正しく理解するならあなたの生き方が変わって来るのです。元ムーディー教会の牧師であったW・Wウァズビー「**知恵は知ることだけでなく歩く道である**」と言います。それが証拠に、この箴言2章のみことばを見て行くと、ヘブル語でこの「道」ということばが8節、13節、15節、19節、20節に5回記されています。つまり、ソロモンはもしあなたが正しくみことばを受け入れたなら、そのみことばはあなたのうちに働いてあなたの生き方を変えて行く、それだけの力をもっていると言うのです。ですから、7節から見て行くと、どのように生きて行くのかが書かれています。7-8節「**彼は正しい者のために、すぐれた知性をたくわえ、正しく歩む者の盾となり、8 公義の小道を保ち、その聖徒たちの道を守る。**」、これは歩みのことです。彼らが正しく歩んで行くようになると言うのです。ヨブはヨブ記28：28で「**見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。**」と言っています。つまり、神の知恵は間違いなく私たちの生き方に影響を及ぼすものです。5節を見ると「**そのとき、あなたは、主を恐れることを悟り、神の知識を見いだそう。**」とあります。なぜ、ソロモンは神を恐れることと神の知識をここに並べて書いているのでしょうか？それは、神の知識をもっている人は間違いなく神の前に神を恐れる生き方をする人だからです。関連しているのです。本当に知恵ある人は神に対して恐れを抱いて、神の前に正しく生きて行こうとする人です。神の原則に従って行こうとする、神が喜ばれることをして行こうとするのです。先ほどのW・Wウァズビーはこのように言っています。「6節から9節を見ると、そこには神が神の責任を果たされることが書いてある。そして、1節から5節に、もし、あなたが自分の責任を果たすならと書いてある」と。考えてみてください。神はあなたに知恵をくださいます。神はあなたの生き方を変えて行ってくれます。神はあなたが正しく歩んで行けるように導いてくださいます。「もし」と条件があるのです。もし、あなたがあなたのすべきことをするなら…です。何をするのでしょうか？見てきたように、しっかりみことばに耳を傾け、正しくそのみことばを理解することです。ヤコブも言いました。「**また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。**」(1：22)。みことばが私たちに教えていることは、神によって救われたならその人には変化が訪れる、生き方が変わって行く、新しく生まれ変わったからです。そして、私たちが新しく生まれ変わった者として正しく生きて行くために必要なものは、知恵なのです。神はそれを私たちにくださるのです、もし、私たちが正しくみことばを学び正しく理解して行くなら…、そのために私たちは努力しなければいけません。人生が変わらない、生活が変わっていないという人がたくさんいます。私はイエスを信じたけれど余り変わっていませんと、おかしいです。神は変えると言われた、こうすれば変わると言われた、でも、変わっていないというのは、すべきことをしていないのか、それとも、変えてくださる神がうちにいないのかです。

使徒の働きをもう一度見てください。ステパノという人物の特徴は、知恵に満ちた人だった、彼のうちには知恵があったと言うのです。彼は神のことをより正しく知って、理解して、そして、神の助けによってそのように歩んでいた人物だったのです。クリスチャンである皆さん、今のことをしっかりと覚えていてください。神はあなたを変えていってくださる、あなたがイエスを信じたその瞬間から神はあなたを変えて行ってくくださる、それはあなたが神の栄光を現わす者として変えられて行くのです。しかし、このみことばに対して、いい加減な聞き方をして、いい加減な学び方をしているのなら、あなたの生活は変わってきません。あなたはしっかりとみことばを学んで正しく理解するように努め続けて行

くことです。それにしっかりと真剣に励んで行くことです。そうすると、神はあなたの内に働いてくださる、そうでなければ、この国の人々は私たちのうちにキリストを見ません。私たちがどんなにすばらしいことを言っても、彼らは私たちがどのように生きているのかを見ています。神は私たちの生き方も変えて、キリストのすばらしさを証しようとしています。神はあなたを変えてくださる、しかし、そのために私たちはしなければならないことがあるのです。ステパノという人物はそれを行っていた人物です。

3. 信仰に満たされた人

信仰が彼の心を支配していたのです。5節に「**彼らは信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ…**」とあります。信仰、すなわち、神への信頼のことです。私たちが覚えていなければいけないことは、このステパノが直面していた問題です。彼がいた状況は大変なものでした。というのは、彼は迫害に直面していたからです。6：9「**ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジャから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。**」、ステパノはある会堂でメッセージをしたのです、イエス・キリストの福音を伝えたのです。そうすると、人々が彼に向かって議論を始めたのです、反論をし始めたのです。そして、その後、このステパノに対する迫害が非常に大きくなって、7章の終わりにある通り、彼は石打ちによって殉教して行くのです。彼の周りには、怒りをもって彼を責める人々が溢れていたのです。ところが、この7章を読んで行くと、彼は彼を迫害し憎む人々が周りに溢れている状況の中にあっても、大胆に神のことを語っています。いったい、どこからそのような勇氣が与えられたのでしょうか？ 私たちも聞いてくれる人に語るの簡単です。皆さんの親族の中でも、一生懸命神の話をしていても皆反発するかもしれません。反発だけでなく、もっと身の危険を感じるようなことがあるかもしれません。そうすると、私たちは止めておこう、大変なことになりそうだから止めておこうと考えがちです。ところが、ステパノはそのような状況の中でも怯むことなく神の大切なメッセージを語ったのです。

いったい、何がこのような勇氣を彼にもたらしたか、それは、神に対する「知識」なのです。つまり、ステパノは「私の神はどういうお方なのか」をよく知っていたのです。その知識が彼に勇氣をもたらしたのです。7章を見て行くと、その中で彼自身ももっていた神観が溢れています。(1) 神は主権者＝「私の神は主権者なる神だ」と言っています。もちろん、その通りには言っていないが、彼の語ったメッセージを聞くと、神は主権者である、すべてのことをみこころのままに導いておられるお方だと告白しています。アブラハムに始まり、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、ダビデ、彼らを導いて来られた、これが私の神だと。(2) 神は真実なお方＝同時に、ステパノは「私の神は真実な神」、つまり、約束を必ず守られるお方であると告白しています。神が言われることは必ずその通りになると。(3) 神は創造主＝7：48から見て行くと「私の神はすべてのものをお造りになった創造主だ」と言っています。(4) イエス・キリストは真の神＝そして、51－53節を見ると「イエス・キリストは真の神である」、正しいお方だと告白しています。彼にはこの正しい知識がありました。神がどういうお方か、イエスがいったいどれであるかを知っていました。この正しい知識が彼に強い確信をもたらしたのです。これが事実だから私はこの方を信じて行こう、この方に信頼をおいて行こうと、そういう信仰をもっていたから、このような迫害に直面していながらも、彼は希望と期待をもって歩むことができたのです。

そこで私たちは考えなければいけません。私たちは毎日の生活の中でいろいろなことを経験します。辛いこと、悲しいこと、自分の思い通りに物事が進みません、自分の願っていないことが起こってきます、これが現実です。その中で皆さんどのように生きておられますか？ 大変な問題を抱えているあなたは、その問題の中であってどのように生きていますか？ 主を信頼して歩んでいますか、それとも、主を疑って、心配しながら生きていますか、どちらでしょう？ ローマ人への手紙4章に、アブラハムという一人の信仰者についてパウロが教えています。ローマ4：17「**このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。**」、アブラハムがどのようなことを信じていたのか、パウロは次のように言っています。アブラハムは彼が信じた神がどのようなお方か、(1) 死者を生かす神＝私の神は死に勝利されたお方、死人を生かすことができる神、不可能と思えることも可能な神である、それがアブラハムの信仰だったと言います。(2) 創造の神＝「**無いものを有るもののようにお呼びになる方**」、創造のことです。神は何もないところに「光よ、あれ」と言われ光ができたのです。そのようにして神は何もないところからすべてのものをお造りになったのです。そのような神であることをアブラハムは知って、そして、歩んだのです。ですから、続いてこのように教えます。4：20－21「**彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強く**

なって、神に栄光を帰し、**：21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」**と、アブラハムのこういう信仰が神の栄光を現わしたのです。私の神には不可能はない、私の神は約束されたことを必ず実現なさる方、私はそのような神を信じたと言うのです。

皆さん、どうですか？そのような信仰をもって信頼をもって歩んでおられますか？問題はたくさんあります。学校でも職場でも家庭でも…。でも、そのような現実の中であって、あなたはその問題に対してどのように向き合っていますか？あなたはその問題に感謝していますか？私たちがすることは、「神様、この問題を解決してくれたら感謝します」ということです。だから、いつまでたってもあなたに感謝がないのです。あなたは「自分の思い通りなれば感謝します」と言っているのです。それはだれでもすることです。アブラハムの信仰は違ったのです。自分の思い通りにならなくても、神が主権者であり、神が正しいことをご存じだから、私はこの状況にあってもあなたを信じて信頼して感謝しますと。あなたが抱えている問題は分かりませんが、その問題の中であって、神様、私はこのような状況の中に置かれていることを感謝します、なぜなら、あなたはすべてのことをご存じであり、あなたはこの状況を通してご自身の栄光を現わすことを私は信じていますからと、言えるでしょうか？全然違うアプローチです。神様、私はあなたを信じています、あなたは真実なお方です、不可能を可能にできる方です、だから、私は心がグーと苦しくなって、肩がだんだん重くなるのを感じますが、神様、私はそれを止めて、あなたを信頼します、あなたは神です、あなたのみわざを成してください、私がそれを喜んで期待して受け入れることができるように助けてくださいと。どこにこのようなアブラハムのような信仰者がいるのでしょうか？このアブラハムのような信仰をもった人が私たちの群れの中にいるのでしょうか？このような信仰をもって神に栄光を帰している人がいったい何人いるのでしょうか？こういう人が必要なのです。そして、こういう人物がこのステパノだったのです。迫害に直面していながら、彼はそこで怯むことなく「私はあなたを信じます。みこころが成りますように」と、そのように確信をもって歩んだのです。心配や疑いを持ってあなたは歩んでいませんか？希望を見失っていませんか？もしそうであれば、あなたは見るところが間違っています、絶対者なる神を見なければならぬのです。

4. 恵みに満ちあふれた人 8節

8節「**ステパノは恵み…に満ち**」、彼は非常に恵み深い人物であったというのです。というのは、彼の周りには彼を憎む人々が溢れていました。彼らは石をもってこのステパノに石を投げつけたのです。石打ちでもって彼を殺そうとするのです。7：57-58「**人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。：58** そして彼を町の外に追い出して、石で殺した。」、59節「**こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、**」大きな石が頭に当たり、顔に当たり、後頭部に当たり、体中に当てられているその最中であって、ステパノがしたことは60節「**ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください。』…**」、このような目にあっても、この人々によって石打で今まさに処刑されようとしているこの中であって、「**この罪を彼らに負わせないでください。**」と、聞いたことがありますか？イエス・キリストが十字架にかかったときどうでしたか？「**父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。**」（ルカ23：34）。このステパノはイエスがそう言ったからそのことばを繰り返したのではありません。彼の心の中には神の恵みが満ちあふれていたのです。彼自身は、どのような罪人に対しても神がどれほどの恵みをくださったのかがよく分かっていたのです。こんな罪人のかしらのために神はいのちを捨ててくださった、こんな罪深い私を永遠の地獄から救うために神は犠牲を払ってくださった、そのすばらしい神の恵みが彼の心の中にはしっかりと明確にあったのです。ですから、彼がしたことは、その同じ愛をもって人々を愛そうとした、たとえ、それが自分を殺そうとしている人々であったとしても。このような人に彼は変えられたのです。自分を憎む者を憎む人はたくさんいます。でも、それは神の栄光を現わしません。キリストが神に敵対する私たちを愛して受け入れてくださったように、神が私たちも同じように変えてくださって、敵を愛するときにキリストの栄光が現わされて行きます。ステパノは恵みに満ちあふれていた、その恵みが彼を支配し彼の心を支配し、そして、彼の行動を生み出して行ったのです。

救われたことを感謝している人、その人は人を赦すことができます。もし、人を赦すことができなったら、もう一度思い出さなければいけません。神が罪人のかしらである私を赦してくださったという事実を…。

5. 力に満ちていた 8節

8節にありました、「**ステパノは恵みと力とに満ち**」と。人々の間ですばらしいみわざを為したのです。「**…人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていた。**」と、そのようなわざがある時期は伴いまし

た。なぜなら、まだ聖書も完成していなかった、ステパノのメッセージが神からのものであるということを証明するために、神はこのような奇跡のみわざをなさいました。思い出してください。使徒1：8で「**聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。**」と主が言われたことを。その力をもって彼はこの神から与えられた働きをしていたのです。自分の力ではなく、神の力によってこの働きを為していたのです。これがステパノでした。

皆さん、彼はこのように生きて彼は殉教して行くのです。もしかすると、多くの人々はこのように思うかもしれません。彼は人生を無駄にした、もう少しうまくやっていたら長生きできたのにと。でも、神はそうにお思いになりません。なぜなら、このステパノの殉教を通して何が起こったのでしょうか？8章の初めに「**1 その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。**」とあり、この出来事をきっかけにして、人々は世界中へと出て行くのです。4節「**他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。**」、世界宣教が始まったのです。そうして、福音が日本にも来たのです。神の前にこの殉教は神の過ちではありませんでした。神はこのことを使って、神のみこころをなさったのです。

勝利者の冠、その名にふさわしい生き方をした人物、それがステパノでした。問題はあなたがこれからどのように生きて行かれるかです。あなたは人生を無駄にしていますか？あなたは今日見たように、私たちの信仰の先輩であるステパノが歩んだように生きておられますか？皆さん、このように生きることができるのです。神はあなたを助けてくださり、用いてくださる、しかし、大切なことは、あなたがそのことを願わなくてははいけません。主が教えてくださるようには生きて行きたいと決心しなければいけません。あなたの責任を果たすまで、神は働きを始めることはできないのです。

願わくは、「神さまどうぞ、私の今までの私の信仰を赦してください、今から残されている地上の短い人生を、神様、あなたに喜ばれるために生きて行きたい。神様、残された人生をどうぞあなたのために用いてください。」と、そのような信仰者がこの中におられることを期待します。その期待は私個人ではありません。あなたの主である神が望んでおられる期待です。あなたはどのようにお答えになりますか？